

「言語文化」の学び

—系統性と接続—

信州大学 西 一夫

報告の前提

学習内容に関する課題を踏まえた検討（2/9）

- 論点4 言語文化の継承・発展
- 小・中学校の学びと高等学校の学びとの接続が不十分であることをどのように改善するか
- 言語文化への理解を深める学習を，どのように充実させるか

■改善の方策

- 小中と高等学校の学びの接続強化
- 言語文化への理解を深める学習の充実

「我が国の言語文化」とは何か

- 我が国の言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、またそれらを実際の生活で使用する ことによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。（小学校解説p.25）

→中学校・高等学校（必修科目「言語文化」）も同じ
（中学校解説p.24，高等学校解説p.111）

高等学校必修科目「言語文化」の目標

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。（「知識及び技能」の目標）
- 「言語文化」では、科目の性格を踏まえ、中学校第3学年において「我が国の言語文化に親しんだり理解したりする」としていたのを受け、我が国の言語文化に対する理解を深めるとしている。（高等学校解説p.110）
- 「言語文化」では、これらのうち、文化としての言語、文化的な言語生活、多様な言語芸術等に重点を置き、理解したり尊重したりすることにとどまることなく、自らが継承、発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している。

（同上p.111）

指導事項の分析

小学校の指導事項（伝統的な言語文化①）

- ア 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。（低学年）
- ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。（中学年）
- ア 親しみやすい古文や漢文，近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。（高学年）
 - 学習素材：具体的な学習材
 - 学習活動：音声言語を基本とする
 - 音読するなどして言葉の響きやリズムに親しむことを系統的に示している。（解説p.25）

小学校の指導事項（伝統的な言語文化②）

- イ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと。（低学年）
- イ 長い間使われてきたことわざや慣用句，故事成語などの意味を知り，使うこと。（中学年）
- イ 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知る。（高学年）
 - 学習素材：具体的な学習材
 - 学習活動：「気付く」「知る」「使う」活動

中学校の指導事項（伝統的な言語文化①）

- ア **音読に必要な**文語のきまりや訓読の仕方を知り，**古文**や**漢文**を**音読**し，古典特有のリズムを通して，古典の世界に親しむこと。
（第1学年）
- ア 作品の特徴を生かして**朗読**するなどして，古典の世界に親しむこと。（第2学年）
- ア 歴史的背景などに注意して**古典**を**読む**ことを通して，その世界に親しむこと。（第3学年）
 - 学習素材：具体的な指示なし
 - 学習活動：音声言語を基本（「読む」は音読・読解）
 - 音読するなどして我が国の伝統的な言語文化の世界に親しむことを**系統的**に示している。（解説p.24）

中学校の指導事項（伝統的な言語文化②）

- イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。
（第1学年）
- イ 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、
古典に表れたものの見方や考え方を知ること。（第2学年）
- イ 長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして
使うこと。（第3学年）
→学習素材：具体的な指示なし
→学習活動：「知る」「読む」「使う」活動

高等学校必修科目

「言語文化」の指導事項（伝統的な言語文化）

- ・ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。
- ・イ 古典の世界に親しむために，作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。
- ・ウ 古典の世界に親しむために，古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり，古典特有の表現などについて理解すること。

→学習素材：おおよその内容（特質・関係，歴史・文化，表現）

→学習活動：「理解」する活動

「言語文化」の指導事項（伝統的な言語文化）

- ・ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

→ **古典を読む**とは、古典の原文を逐語的に現代語訳にすることではなく、〔思考力、判断力、表現力等〕の「B読むこと」の（1）の指導事項を身に付けることを指している。そのためには、文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などを断片的な知識として理解することのみが目的とならないよう、原文に加え、**内容の取扱いの（4）のイ**に示しているとおり、理解しやすいように**教材を工夫**したり、**指導の方法を工夫**したりする必要がある。（解説p.119）

→ 中学校から高等学校必履修科目「言語文化」への**接続段階（足場掛け）を設定する必要性**

実践事例の紹介

中学校と高等学校との足場掛けを目指して

指導事項の連携による実践事例①

■言葉を中心とした言語文化への「親しみ」

1) 時代を超えた「言葉遊び」 + 漢字への興味

- 「言葉あそび」（後奈良天皇撰『後奈良天皇御撰何曾』）

紅の糸くさりて虫となる。（＝虹）

嵐は山を去つて軒の辺にあり。（＝風車）

梅の木を水にたてかへよ。（＝海）

- その他の漢字遊び

一尺一寸になる家はいかなる家か。（＝寺）

「いとし、いとしと言ふ心」は、いかなる心か。（＝恋（戀））

指導事項の連携による実践事例②

■言葉（元号）を中心とした言語文化への「親しみ」

今日的表現＋漢字指導＝元号「令和」の読み方

- 漢字の読み方

訓読み：漢字の意味に相当する和語（大和言葉）による読み方。（命：いのち）

音読み：漢字の発音に基づく読み方。時代によって呉音・漢音・唐音などに区別。（命：ベイ（漢音）、ミョウ（呉音））
命脈（めいみゃく）・寿命（じゅみょう）

指導事項の連携による実践事例②

■言葉（元号）を中心とした言語文化への「親しみ」

今日的表現＋漢字指導＝元号「令和」の読み方

- 「令」の読み方（音読み）

漢音：レイ、呉音：リョウ

- 「和」の読み方（音読み）

漢音：カ（クワ）、呉音：ワ

元号の典拠とされている存在は？

その時代はどのように発音されていたのか？

指導事項の連携による実践事例②

■言葉（元号）を中心とした言語文化への「親しみ」

今日的表現 + 漢字指導 = 元号「令和」の読み方

- 漢語としての読み方は2通り

呉音：リョウ（令） + ワ（和）

漢音：レイ（令） + カ（和）

- 万葉集の時代は呉音で漢語を読む
- 「漢音 + 呉音」の組み合わせはおかしいか

「言語」の読み方

呉音：ゴンゴ、漢音：ゲンギョ → ゲン（漢音） + ゴ（呉音）

指導事項の連携による実践事例③

■言葉の響き・リズムを中心とした言語文化への「親しみ」

みんな（谷川俊太郎）

（ みんな なくのは ） せみ
（ そうっと ちかづく ） あみ
（ はやしの むこうに ） うみ
（ きらきら かがやく ） なみ

→日本語のリズム・響きを意識した言葉表現

指導事項の連携による実践事例④

■語彙を耕すことを通した言語文化への「親しみ」

言葉の響き・リズムを活用した事例

「那覇□花」→1文字補う

「那覇の□の花」→1文字補う

「那覇の□□の花」→2文字補う

「那覇の□□□の花」→3文字補う

【参考・江戸時代の回文】

長き夜の十の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな

→新学習指導要領で「語彙」を豊かにすることが強調されている。言葉に対する感覚を磨く。

指導事項の連携による実践事例⑤

■ 古典教材を通した言語文化への「親しみ」

【高等学校の古文教材を捉え直す】

帝、「さて、何も書きたらむものは、読みてむや」と仰せられければ、
「何にても、読み候ひなむ」と申しければ、片仮名の「子」文字を十二書
かせたまひて、「読め」と仰せられければ、

(子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子)

と読みたりければ、帝、ほほゑませたまひて、ことなくやみにけり。

(『宇治拾遺物語』)

指導事項の連携による実践事例⑤

■ 古典教材を通した言語文化への「親しみ」

1. 高校生に求められる模範的解答

猫の子、子猫、獅子の子、子獅子（「てにをは」等は最低限附加）

2. 言語文化を豊かにするための方策：面白さ

2-1. 「子」の読みを考える → どのように読むか（漢字指導）

2-2. 読みの数を増やす → 数を増やすための智恵（文字指導）

2-3. 読みを組み合わせる → 多様な組み合わせを創る（語彙指導）

指導事項の連携による実践事例⑤

■ 古典教材を通した言語文化への「親しみ」

3. 成果を共有

ここ逗子。午後五時、寿司来ず。

禰豆子寝過ごし、午後五時ね。

午後五時、少し寝過ごす子。

腰の筋、少し捻って事故ね。

涼し午後、鈴音に寝過ごす。

指導事項の連携による実践事例⑥

■地域地名を通した言語文化への「親しみ」

「相模（国）」＝「神奈川（県）」

地域に残る名称：相武山（相模国・武蔵国）

→相武山小学校（横浜市港南区上永谷1-7-5）

古くから伝わる地名（東永谷・上永谷）：相模国鎌倉郡

現在も残る古地名：相模大野・相模原、武蔵野・武蔵小杉

→地域の地名を素材とした言語文化に対する意識の涵養

→個別化した教材（地域学習を発展）

校種連携の言語文化指導

親しみ（小）→親しみ（中）→**親しみ**、深まる（高）
（興味を**持続させ**、**発展させる**契機）

- 1.重複教材を**無視**しない（学習内容は校種で異なる）
- 2.各校種の**学習内容を把握**する
- 3.**音読・朗読**（**範読**を含む）を大切する
（内容の概括理解に有用・音声による理解）
- 4.**読解のための文法**の有意味性を説く（「芥川」「さらぬ別れ」）
- 5.児童・生徒の**素朴な疑問**を大切にする
（「笑ふ・笑む」の違い、「稚児のそら寝」「香炉峰の雪」）